

厨房機器を東京レールゲートWESTで積替え輸送

東京都に本社を置くタニコー㈱は業務用厨房機器やステンレス容器を製造販売し、ベーカリー・コンビニをはじめ飲食店やホテルなど、さまざまな厨房で必要とされる調理機器や洗浄機器などを揃えている。主力商品のガスレンジ、グリドル、スチームコンベクションオープン、ゆで麺器など「熱もの」と呼ばれる自社製品のほか、他社製品の冷蔵庫等「冷もの」を組み合わせる厨房を提案する。また、ステンレス容器分野でも高い加工技術を持ち、医薬品業界や食品業界で必要とされる高いサニタリー性を提供している。

タニコーの谷口鉄人取締役経営企画本部長は「いずれの製品も国内工場で作成している、オーダー品を得意としています。新商品開発も積極的に進めており、例えば食材の中と外から加熱する「オンデマンドフライヤー」は揚げ時間を最大3分の1に短縮しました。ボックスタイプなのでより安全で、においも気になりません。提供時間の短縮は労働力不足が深刻となっている外食産業の省力化にもつながります」と説明する。

同社には福島県に4工場、北海道、神奈川県に1工場ずつ、



ベーカリーオープンGUTシリーズ スチームコンベクションオープン



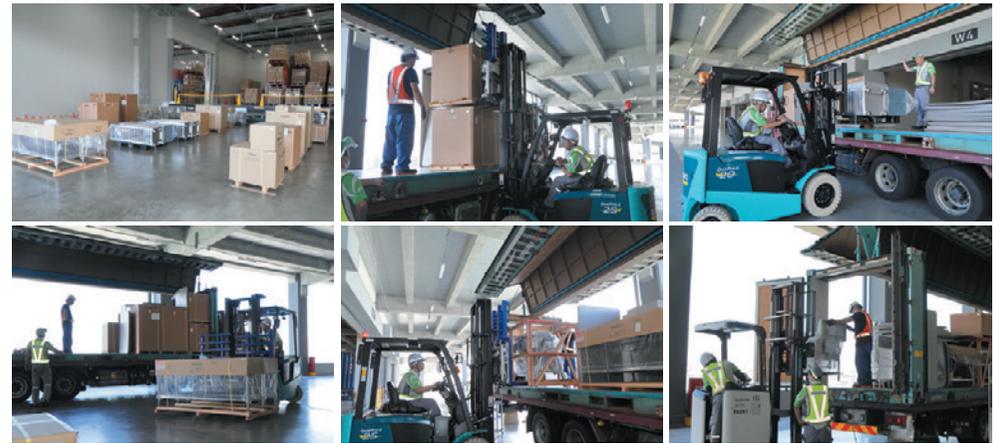
谷口取締役 タニコーが運営するターニーベーカリーカフェで

関連会社㈱タニコーテックには福島県3工場と福岡県1工場がある。製品のアイテム数は3,000以上。これにオーダー品が加わる。工場により作る製品が異なるため、輸送は多品種少量、長距離になる場合もある。これまでは、ほぼトラック輸送だった。

「鉄道は大量に運べるのがメリットです。モーダルシフトの検討を始めたのは2年ほど前。2024年問題が話題となり始めていました。オーダーに対応することを重視するあまり、都度トラックを手配し、国内どこへでも出荷するスタイルでした。しかし、北海道工場から九州向けなど長距離輸送をトラックのみに頼っていたら、今後立ち行かなくなるであろうことは想像に難くない。モーダルシフトに際しては「厨房機器は多品種少量で鉄道向きではない。鉄道コンテナの利用経験がない」という社内の声もありましたが、労働力不足や環境への対策、東北地方の冬季の天候対策など、鉄道にシフトする理由は複数ありました」と振り返る。



東京レールゲートWESTに到着した31ftコンテナ



さまざまな厨房機器を鴻池運輸が31ftコンテナへ積み付け

トレインクロスドックサービス

タニコーでは福島県内4工場の製品を小高流通センター(南相馬市)でとりまとめている。同センターから福岡流通センターへの週1便のトラック輸送を、鉄道にシフトした。

鉄道利用の経験がなかったため、最初は12ftコンテナで試験輸送を行ったが、背の高いものや幅が広いものなどさまざまな製品を効率よく収めるのが難しく、トラックに近い31ftコンテナを利用する検討が始まった。しかし最寄りの貨物駅である小名浜駅から福岡(夕)への31ftコンテナの取り扱いには、中継作業の確認や集配トラックの手配等、多くの課題があった。そこで、JR貨物総合物流部の提案は、西向け貨物列車の拠点、東京(夕)構内にある東京レールゲートWESTを活用するものだった。

東京レールゲートWESTにある鴻池運輸(株)東京レールゲート営業所へ、トラックでタニコーの製品を持ち込むのは、中長距離を中心とした貨物と空車のマッチング(求貨求車サービス)を行うトランコム(株)。トランコムが手配した協力輸送会社のトラックが小高流通センターで集荷し、東京レールゲートWESTへ持ち込む。鴻池運輸が製品を取り卸し、31ftコンテナに積み付ける。31ftコンテナは東京(夕)ー福岡(夕)を鉄道で輸送、タニコー福岡流通センターへ配達される。

小高流通センターから東京レールゲートWESTまでのトラック輸送距離は300km弱。一般的な鉄道コンテナの集貨距離をはるかに上回る。トラック輸送・積替え・鉄道コンテナ輸送を組み合わせるモーダルコンビネーションである。

「オーダー品もありますし、大きさの異なる製品をどう積み合わせるのか、裸に近い状態の厨房機器にどう養生材を入れるのかなど、さまざまな工夫をしました。小高流通センターから貨物駅へのアクセスはよくありません。31ftコンテ

ナの利用が前提だったので、新しい仕組みを提案いただいたよかった」と谷口取締役。

なお、鴻池運輸とトランコムはこのスキームを『トレインクロスドックサービス』と名付け、輸送サービスの一つとして提供している。タニコー、鴻池運輸、トランコム、JR貨物の4社が立ち上げたトレインクロスドックモーダルシフト推進協議会の取り組みは、国土交通省令和6年度モーダルシフト等推進事業に認定されている。

「当社では、これまで物流は生産から切り離された存在でした。製品を作ることに集中して、物流面への配慮が不足しておりました。これからは荷主側も運びやすいように考えていかなければならない。仕組みを見直すため、物流分野を担当する人材を迎えました。製品を分割して運びやすくする、養生材を最小限にできるよう梱包を変える、物流を考慮して生産スケジュールを調整する、AIでレイアウトする、検品の省力化のためにRFIDタグを導入する等、できることから取り組んでいきたいと考えています。今般のモーダルシフトは社内の意識を改革する良い機会にもなりました」と谷口取締役は結んだ。



満載 東京レールゲートWESTで